

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第151号

多摩丘陵に残る
義経の面影 - 14

亀井六郎重清と義経 (その2)

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

亀井六郎重清は、紀伊国名草郡の豪族 藤白鈴木氏の一族の出で、源義経の家臣として源平の戦いで戦功があり、また後に義経の都落ちに従って、最後は兄の鈴木三郎重家と共に奥州平泉の衣川の戦いで戦死した、と多くの歴史書などに書かれています。

ところが、この亀井六郎重清の出自には、近江源氏の佐々木氏の出とする異説があります。この異説は藤白鈴木氏の家伝に拠るもので、その言い伝えでは

その家伝に云う、鈴木三郎重国という人あり。所縁ありて源家に属し義朝に近習す。義経の未だ舎那王といひし時、熊野詣して、藤白の鈴木館に逗留す。此の時、扈従の士・近江源氏 佐々木秀義の六男 亀井六郎重清をして、重国の一子 三郎重家と兄弟の誓いを結ばしめ兩人をして団を取りて、重家は家に留まり父を養い、重清は義経の軍中に従はしむ。

とあります(『姓氏家系大辞典』太田亮著・角川書店による)。

このように亀井六郎は、名前が多く文献に記されているにもかかわらず、その生涯の全貌については殆んど謎に包まれています。重家の祖父 重国は源為義の家臣として仕えたとされ、父 重倫は義朝に仕え平治の乱で戦死したといわれています。従って、鈴木氏と源氏のつながりは亀井六郎が生まれる前からあったことが分かります。源平の戦いには、鈴木三郎重家は義経には従軍せず、弟の亀井六郎重清が従軍しました。また源氏が鈴木氏と以前からの繋がり熊野水軍を義経の見方につける事が出来たと推測できます。さて、この兄弟のその後ですが、前出の家伝によると亀井六郎重清は、頼朝に追われる身となった義経と共に平泉に逃れ、安住の地を得たとの手紙を兄鈴木三郎重家に出し、鈴木三郎は山伏の姿をして奥州に下り、最後は衣川の戦いで兄弟共に戦死をとげました。その後 鈴木氏の家系は重家の弟の治郎重治が継いだといわれています(前掲『姓氏家系大辞典』による)。

一方『義経記』には、文治5年(1189)閏4月30日 藤原泰衡は500騎の兵で、重家・重清ら僅か10数騎の義経主従を衣川館に襲撃。弁慶が「はやせよ、殿ばら。東夷の奴ばらに我らが優美の道を思い知らそう」と、重家・重清の鼓笛の囃しで、謡い舞った後、馬を並べて太刀を抜き、大声で喚き馬を駆けた。重家は、泰衡の郎党 照井太郎らを斬り負かし奮戦したが深傷を受け、

「亀井六郎犬死すな、重家は今はかうぞ」と是を最期の言葉にて腹搔き切って伏しにけり。

重清も「紀伊国鈴木を出でし日より、命をば君に奉る。今思はず一所にて死し候はんこそ嬉しく候へ。死出の山にては必ず待ち給え」とて、鎧の草摺りかなぐり捨てて「音にも聞くらん目にも見よ。鈴木三郎が弟に亀井六郎重家、生年23、弓矢の手並み日頃人に知られたれども、東の方の奴原は未だ知らじ、初めて物見せん」

と言ひ、大勢の中に割って入り腹搔き切って兄の伏し足る所の同じ枕に伏しにけり、とあります。

この亀井六郎重清の屋敷跡が上麻生の常安寺の上の方にあったといわれています。この地に残る『稻毛郷土誌』は丸山教の第三代 伊藤六郎兵衛(葦天)さんが残した地誌ですが、これによると、

麻生の家名館跡に亀井と云う家が昭和まで残っていた。主人は小島鶴松と云って 72~3 歳で名古屋に住んでいる。家は長屋門が建っていて玄関があり 15 畳 2 間、10 畳 3 間、大きな大黒柱を中心に檜作りの大草屋で土蔵が7戸前もあったと云うから江戸時代は名主でもしていたのだろう。主人が勝負事が好きのため没落し数々の宝物は売ってしまい長持ちと大香炉が残っていた。その中に古い鎧が入っていたが、それは弁慶の着用したものだと言ひ伝えられてきたと云う。これは鶴松氏と別れて登戸の小川氏へ再婚した、うめさんから聞いた話である。亀井の本姓は鈴木だが、どうして小島になったのかわからない。

亀井と呼ばれていた家号は幾多変遷に有ったろうが鎌倉時代からの亀井城址と共に続いて来たものだと思う。因みに柿生に多い鈴木姓もあるいは鈴木三郎重家の系統ではないのかとも思える。何れにしても柿生の人達は亀井城址をもっと追究して研究して見る必要があるのではなかろうか。

と述べておられます。皆さんは、どちらの方が史実だとおもわれますか？

何れにせよ亀井六郎は実在の人物には違いありませんが、謎が多く本当の所は良く分からない人物だと言った方がよさそうです。

鶴見川流域の中世
その11

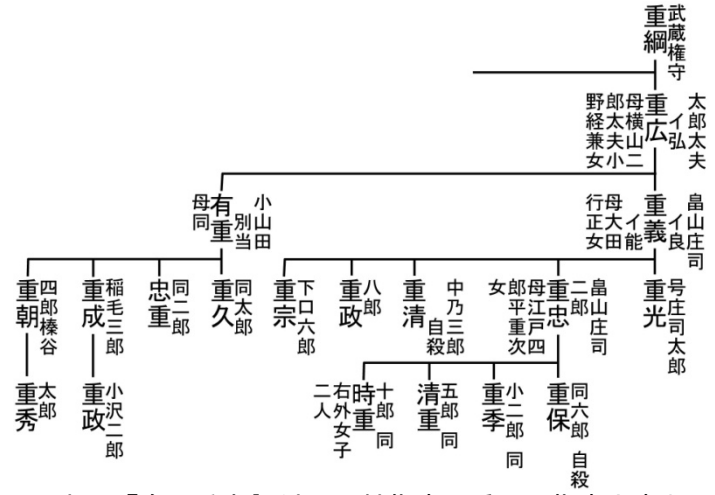
稲毛庄の定説を見直す

◆稲毛庄と畠山氏の関わり◆

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

稲毛庄の地頭は稲毛重成であると言われるが、それを証拠だてる史料は存在しない。一般的に地名と名字が一致している事から稲毛重成を地頭としている。この他に地頭の前身である下司に長寛二年(1164)の被害報告書を作成した大江氏、武蔵七党の西党稲毛氏があげられる(『川崎市史通史編1』)。

近年の中世武士団研究や庄園形成史研究の進展の中で、畠山重忠や稲毛重成を輩出した秩父平氏一族畠山氏の研究も進展を見せている。その研究の担い手の一人である清水亮氏は編著『畠山重忠』の中で、鎌倉時代初期における稲毛庄渋口郷の領主は畠山重忠の弟重宗であるという注目すべき見解を発表した。これまでの研究では重宗は「桓武平氏諸流系図」に渋江六郎と記されていることから、渋江(埼玉県さいたま市岩槻区)の武士であると考えられてきた。これに対して清水亮氏は「鎌倉年代記裏書」建保元年(1213)条における渋口六郎が正しく、「桓武平氏諸流系図」は渋口の口を江に誤写したものであるとした。さらに薩摩藩士指宿氏の家伝文書『指宿文書』に伝来した「平姓指宿氏系図」では重宗に「下口六郎」と注記を付けている。「下口(しもくち)」の読みは「渋口(しぶくち・しばくち)」とほぼ一致している。畠山重忠滅亡後に重忠の側近である本田近常の子孫は薩摩島津氏の被官化している。この本田氏を介して畠山氏に関する精度の高い情報が薩摩国に伝わった可能性が高いので、「平姓指宿氏系図」の史料的な価値は無視できないとして渋口説を補強している。清水亮氏はさらに稲毛庄の設立・現地支配には畠山重能・小山田有重兄弟が関わっているとのべている。



図版1 『畠山重忠』所収 平姓指宿氏系図○指宿文書より抄録

清水亮説にはいくつかの検討すべき課題が残されているが、渋江説が系図を唯一の根拠としているのに比べて渋口説は傾聴すべき点がある。渋口郷については既に143~144号で触れているがもう一度取り上げてみよう。

さて、清水亮説に従うと渋口重宗が稲毛庄内渋口郷を本貫地とする背景には、稲毛庄の設立に関わった重宗の父畠山重能の存在があり、稲毛重成が稲毛庄を本拠地とする背景には重成の父小山田有重の存在があることになる。

畠山重忠が元久二年(1205)に二俣川で討たれると、従弟の稲毛重成は重忠を讒訴した咎で弟の榎谷重朝とともに誅殺されている。一方、畠山重忠の弟長野三郎重清は信濃国にいたが「被誅重忠之後」に自殺に追い込まれている(「桓武平氏諸流系図」)。しかし、重宗は奥州にいたと『吾妻鏡』に記されているが「桓武平氏諸流系図」にある三郎重清のような重忠誅殺に連座した注記は見られないので、生き延びた可能性も否定できない。この事も清水亮氏が論拠とした「鎌倉年代記裏書」建保元年条における渋口六郎の傍証となる。



図版2 稲毛庄内渋口郷等想定図 『川崎市史通史編1』付録より抄録

さて、渋口郷を畠山氏の庶子六郎重宗が本貫地とする事で井田郷・小田中郷・稲毛郷等の稲毛庄内の他の郷とは異なる歴史を刻むことになる。南北朝時代から戦国時代の歴史については143~144号で述べているので重複を避けて、ここでは多摩川沖積低地にある稲毛庄稲毛郷・小田中郷・井田郷と比べてどの様な特徴があるのだろうか見ることにしよう。

渋口郷の地形は多摩丘陵と多摩川と矢上川がつくった沖積地からなっている。同郷は橋樹郡の中央に位置し、古代の橋樹郡衙に隣接し、郡寺であった栄興寺(影向寺)の木造薬師如来は12世紀前半、両脇侍菩薩像は12世紀後半の作と推定されている。これは稲毛庄の設立と時期が重なっている事に留意したい。隣接する矢上川流域の有馬郷・山田郷には鎌倉時代の寺院が存在したことが史料や伝承から分かっている。以上のことから、この地域が中世前期には文化の先進地域であったと考えられる。また、相模・武蔵から下総を結ぶ中世の幹線道路である中原街道が丘陵部から平野部に入る場所にあり、複数の道が分岐する交通の要の位置にあった。

(つづく)

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(7)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

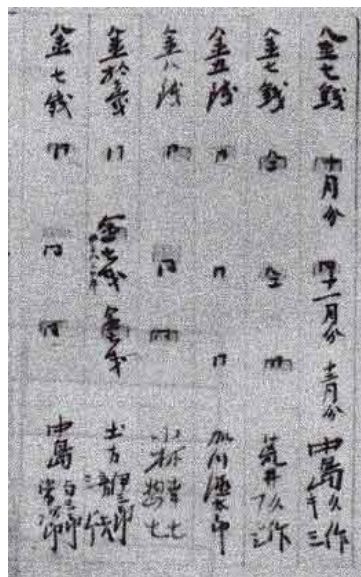
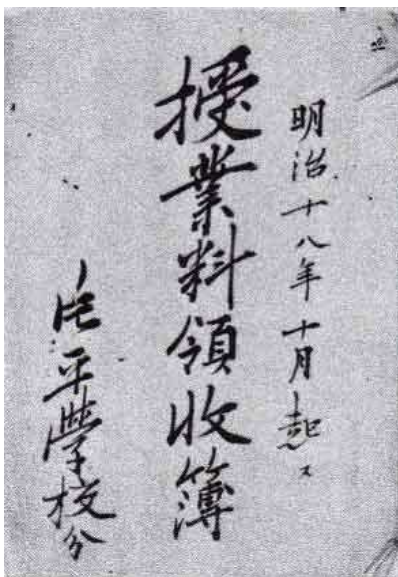
◆「学制の公布」と就学状況◆

今シリーズの第2回に記しましたが、学制の公布後、各地における下等小学校の設立は、驚くようなスピードで進みました。幕末から明治にかけての寺子屋の普及が、その背景にありました。寺子屋で学んでいた子供たちが、そのまま何の抵抗もなく、小学校に横滑りしたからです。しかし、都市部の男児の寺子屋への就学率はかなり高かったのですが、農村部ではごく一部に留まっていた。まして女児の就学はさらに低かったのです。その結果が、学校数の伸びに比べ、子どもたちの就学率の低さに繋がりました。欧化主義を掲げ、欧米の近代教育を導入し初等教育の全児童への徹底を目指す政府と、民衆の教育観の間には、大きな隔たりがあったのです。とりわけ貧しい農村部での開きが大きかったのです。学制施行初年度の明治6(1873)年の就学率は男児で39.9%、女児は男児の半数以下の15.1%に留まっていた。

この状況は、政府をはじめ地方の学事関係者などによる懸命の勧学奨励によっても、僅かずつしか改善しませんでした。学制施行の4年後、明治10(1877)年においても、就学率は男児で56.0%、女児では22.5%、平均で38.3%に留まっていたのです。「女に教育は必要ない。それどころか有害でさえある」とする民衆の学校観は、僻地に行けば行くほど強かったのです。下等小学校は、八級に分かれ、先ず八級に入学して半年学ぶと試験を受け、合格すると次の級に進むことを繰り返し、きちんと勉強すれば4年で一級を終了する形になっていたのですが、記録の残っている明治8(1875)年の各級別の児童の在学状況を見ると、下等小学校の第八級(1年の前期に相当)に全児童の約65%が在籍し、第七級(1年後期に相当)には約17%が在籍しており、全体の約82%が一年生だったのです。開設間もない混乱期であったことを割り引いても、この一年生の数は多過ぎます。なお、先生が子ども達を躰けることに追われ、満足に授業が出来ない状況にあったことが推察されます。

2年後の明治10(1877)年においても、第八級の在学者は約49%とほぼ半数を占め、第七級が約19%と合わせて約68%を占めていたのです。このような状態にある上に、当時の学校は有料でした。財政難の政府は、学校の建設や教員の給料など全てを地方に丸投げし、地方はまた末端の行政単位である村に負担を負わせたのです。当然授業料やテキスト代などは家庭の負担となっていたのです。その上、当時の農村や都市の職人や小商店では、6歳を過ぎた子どもたちは大事な働き手として数えられていたのです。そんな働き手を学校に通わせると命じられ、その上授業料やテキスト代を払わされるのです。さらに徴兵令では、20歳の働き盛りの男子が3年間の兵役に駆り出されます。地租改正では重い地租の負担が降ってきます。

戊辰戦争期に「ええじゃないか」を踊り狂いながら、徳川幕府に替わる新政府に期待を寄せ、僅かでも暮らしが豊かになることを期待した民衆は、近代化＝欧米化を急ぐ新政府によって、慣れ親しんだ社会システムや生活習慣を大幅に変えることを迫られ、その上今までよりはるかに重い税負担を強いられることになったのです。徳川幕藩体制の下でも、道普請や城の修理などや荷役などに狩りだされることはありましたが、その折には年貢の減免という見返りがついていました。ところが兵隊にとられた働き手や学校に行かせなければならぬ子どもの労働分を、地租の一部負担に置き換えてその分地租の負担を軽くする見返りなどは、まったくなかったのです。そこで民衆は、こうした負担を血税だと主張して、各地で新政府反対一揆をおこしたのです。



こうした一揆では、明確に地租改正に反対した一揆を除けば、一揆勢の要求は多岐にわたり、徴兵令や学制それに賤民廃止令などへの反対が主張され、戸長や村吏の家宅、小学校、交番(当時は邏卒屯所)などを打ちこわしたり焼き打ちしたりしたのです。明治6(1873)年の名東県(現香川県)の一揆は、7郡にわたる広範囲な一揆となり、48の小学校が放火されて焼失しています。同じ明治6年の5月26日～6月1日かけて続けられた美作(現岡山県)一揆では、一揆勢は、美作地方が属する当時の北条県の県庁所在地、津山に押し寄せ、津山市内の全小学校を放火により焼失させています。国家による就学強制、勧学奨励を迷惑千万と考える民衆も、まだまだ多かったのです。

(参考 文部省編『学制百年史』) (続く)

(左)明治18年の授業料領收簿の最初の頁 (右)授業料領收簿八級～六級は2銭、進級するにつれ高くなる。兄弟は一緒に収めた。

日本の民間信仰 2

正月について

琴平神社宮司 志村幸男

前は「正月」についてでした。今回は、伝統的な正月の迎え方についての一部を書かせて頂きます。すでにご周知の事ばかりと存じますが、正月の行事は、「歳神」と呼ばれる神格を家々で迎え祀ることにあります。正月を特徴づけるものをいくつか上げてみます。

まずは「松飾」です。これには二つの役割があり一つは、歳神様がこの松飾りを目標に来訪し依代(よりしろ)の座としての役割、もう一つは、歳神様をお迎えし祀った家の中が聖なる空間であることを示す結界として邪悪なものを除ける役割です。

次に「鏡餅」、これは丸餅を二段に重ね、神仏にお供えする物です。又松の内の神様の魂が宿る拠り所とされています。鏡には、神仏の魂が宿るとされていたことから丸いお餅を鏡に見立て、このようになったとされています。二つに重ねるのは、新たな年が招福で幸を重ねられる様願っての意味からだと言われています。他には「歯固餅」ともい、長寿を願ってお供えする意味もあります。



「お屠蘇」、正月三が日に延命長寿を願って飲むお酒で、邪気を払うと言われます。漢方薬のエキス(山椒、桔梗、他)が入ったお酒です。古くは中国の医師が風邪予防のために作った薬酒で広く伝わって正月に飲むことが定着したものです。

「お雑煮」、歳神様に捧げた供えものを頂く直会(なおり)の膳でもあります。その中には餅を入れますが、餅は古くからハレ(祝い)の食材で、ご神徳、健康を願う食材として広く食べられています。東日本では、四角い切り餅で、西日本では丸餅にすることが多いです。

「若水」、清浄な水として元旦の早朝に汲んだ水と呼びます。この水で正月料理の煮炊きをし、茶をたて「福茶」として頂くと邪気が払われて健康長寿でいられると家族そろって飲む習わしがあります。

「おせち料理」、節供を意味し、節目である節句に行く神祭りのお供え物から来ています。古くから日本には、多くの節気や節句があり、その時に捧げる神饌物、今では、正月だけが残りました。おせち料理を代表するものに「三つ肴」があり、関東では黒豆・数の子・ごまめを云い、関西では、黒豆・数の子・たたきごぼうと違いがあります。正式な「おせち料理」は、四段重ねの重箱に入れます。一の重に「三つ肴」、二の重に「口取り」、三の重に「海の幸」、四の重に「山の幸」を入れます。三つ肴以外では、かまぼこ・きんとん・八つ頭・伊達巻・蓮根・昆布巻・くわい・柚子・海老・鯛・あわびなどですが地方によって違いがあります。

「お年玉」、正月子供を中心に与える小遣銭や品物を云いますが、以前は正月についた餅を丸餅にして、家族や使用人などに与えたものでした。丸餅には神様が宿るとされ、古くは「歳魂」とのことからお年玉と呼ばれています。

このような風習はそれぞれの家庭で違いはありますが、良い年をお迎えされますようご祈念申し上げます。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

12月 5・12・19日(毎土曜日) **1月** 10・17・24・31日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (12月26日は休館です)